

防波堤被害予測伏せる

復旧工事 岩手県住民の不安放置

岩手県釜石市沖で、国が「釜石湾口防波堤」の復旧工事を進めている。東日本大震災の津波で8割が壊れたが、震災から5カ月で490億円かけた再建を決めた。だが、周辺の住民は「防波堤に跳ね返って高くなった波で、被害が大きくなったのでは」と調査を求めた。

岩手県は、湾口防波堤の影響をひそかに検証したが、周辺の被害が拡大すると出た結果を伏せて、国の事業を静観している。

▼3面Ⅱ再建の説明不十分
「約30年前に湾口防波堤を造る時から、高い波が来るって両石の人は思っていた」。釜石市両石にあった自宅が流され、内陸の仮設住宅で暮らす久保典男さん(62)は打ち明ける。

両石は両石湾の奥にあり、市役所や製鉄所がある中心部から約5キロ北にあ

る。重要港を守るための釜石湾口防波堤の建設が1978年に始まる頃から、両石の人たちは不安を抱いていた。「中心部は守られるが、両石へは、津波が防波堤で跳ね返って何倍も高くなって来るのでは」

両石町内会長の瀬戸元さん(68)は、防波堤が造られる時、東北大が跳ね返る波の影響を模型で実験したことを覚えていいる。遡上した水が峠を越えるほど広がったという。

2011年3月11日、両石を襲った津波は集落をほぼ壊滅させ、45人が犠牲となった。瀬戸さんは「なぜ両石は他より被害が大きかったのか。湾口防波堤の影響はなかったのか調べてほしい」と釜石市や岩手県の職員に訴え続けた。返ってくるのは「リアス式の特徴では。湾口防波堤の影響はな



い」「調べていないのでわからない」という答えばかり。国に訴える場もなく、11年8月に再建が決まった。

ところが朝日新聞の取材で、釜石湾口防波堤があることで両石の被害が大きくなるとする岩手県のシミュレーションがあることがわかった。県は検証結果の存在を否定している。